

ON THE SPOT

現場から

●コーチング

海外経験を活かして学ぶ コーチング

オリンピックなど国際舞台で最高のパフォーマンスを引き出し、国際競技力向上を図るため、去る5月18、19の両日にわたり、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）にて「平成18年度スポーツコーチサミット」が開催された。

競技者の育成・強化にあたるコーチ、スポーツ医科学研究者および各都道府県のスポーツ行政担当者が一堂に会し、それぞれの分野における成果や課題についての競技・情報交換を行う場である同サミットは、2つのシンポジウムと4つの分科会で構成された。開催されたなかから抜粋して紹介したい。

まず始めに行われたのは「トリノオリンピックを振り返って」と題した講演・シンポジウム。それぞれの

競技ごとに得られた成果はあったかもしれないが、全体のメダル獲得数をみると、フィギュアスケート女子荒川静香選手の金メダル1つという厳しい状況を踏まえ、冒頭の遅塚研一氏（トリノオリンピック日本選手団団長）による講演では「派遣選手の決定方法、出場選手の意識レベルの違いなども含めて、今後はもっといろいろと選定した条件で考えなければならぬことが多くあった」など、厳しい言葉が寄せられた。

続いて村里敏彰氏（トリノオリンピック本部役員）をコーディネーターに、山中茂（アルペン監督）、高野弥寸志（スキーフリースタイルコーチ）、鈴木恵一（スピードスケート監督）、川上隆史（ショートトラック監督）の4氏がパネリストとして登壇し、トリノまで4年間の強化方策を振り返るとともに、トリノオリンピックの結果を分析・検証した。

採点競技であるスキーフリースタ

イルモーグルで5位入賞を果たした上村愛子選手は、ルール変更に伴い難度の高いエアーを重視し、練習に臨んだ。しかしオリンピックが近づくにつれ「エアーよりスキーの滑るテクニックが重視されてきた」と高野氏が振り返るように、今回の結果を受け、バンクーバーに向け「情報の読み取り能力や戦略分析面でより充実することが必須」と述べた。

鈴木、川上両氏に共通していたのは「常に練習することができる環境（リンク）がほしい」ということ。トップレベルの選手の強化という面もあるが、4年または8年単位での長期にわたる一貫指導システムの構築や、競技の普及も含め、両氏からは環境不足の嘆きの声があがった。

メダル獲得こそならなかったが、50年ぶりの入賞を果たしたアルペン競技は大きな成果を得たと言える。山中氏はトリノまでの強化策として、「徹底した選手・スタッフのチーム間連携と、それぞれの役割を明確にしたこと」を挙げた。さらに、長野オリンピックではBチーム、ソルトレイクではジュニアチームのコーチを務めた児玉修氏がトリノでヘッドコーチを務めたことを例にして「長いスパンで取り組んできたことが、間違いではなかったというのが今回のトリノで証明された。この成果をバンクーバーではさらにワンランク上の結果へとつなげたい」と締めくくった。4氏の話からも、バンクーバーに向けて、まず取り組むべきは長期的視野に基づいた選手育成と言えるのではないだろうか。

続いて行われたのは「世界から学



さまざまなテーマに基づいて展開されたスポーツコーチサミット

ぶ〜海外での経験を活かしたコーチング」と題したシンポジウム。田嶋幸三氏（(財)日本サッカー協会技術委員長）をコーディネーターに、岡田弘隆（(財)全日本柔道連盟男子強化コーチ）、青柳徹（(財)日本スケート連盟強化副部长）、山本佳司（滋賀県立野洲高等学校サッカー部監督）の3氏がパネリストを務めた。

3氏に共通しているのは、留学経験があるということ。岡田氏はイギリスで、青柳氏はオランダで、山本氏はドイツで「コーチング」について学んだ経験を持つ。岡田氏はイギリス留学時に感じた点として「勝ち方の考え、環境の違い」の2点を挙げた。あくまで“一本”での勝利にこだわる日本に対し、ヨーロッパはポイントで僅差で逃げるといった考えに基づいており、国際大会で日本選手が敗れた試合を分析する際にも「勝ち方」の違いはどのような動きにつながっているかを研究し、投げるときと、投げられるときの差を明確な形で選手に伝えたそうだ。

青柳氏はオランダの年齢ごとに区分したトレーニングプログラムを提示し、「選手のために何をすべきか」というコーチに求められる要素について述べた。コーチの資格制度も高い質が求められるというオランダでの経験から学んだこととして「直すべきところばかりに目を向けるのではなく、長所を伸ばすために何をすべきかを考える。効率的にトレーニングできれば的確に練習できる」と述べた。

今冬の全国高校サッカー選手権で優勝した野洲高校を率いる山本氏は、大学まではレスリング選手として活躍していた。当時から「世界を相手に戦えるのは柔道かレスリング」と世界を視野に入れており、サッカーの指導をするようになってからも選

手たちに対して「選手権で優勝するように」ではなく、諸外国の選手たちと同じように「世界で活躍する選手になりたい」「ワールドカップで優勝したい」と目標設定をより高く掲げることで、同校独自の「セクシーフットボール」と言われる個人技を活かしたスタイルを生み出した。さらにドイツの育成システムを参考に、近隣の中学校やクラブチームと連携し、同校のグラウンドで一緒に練習する「下部組織」とも言えるシステムを構築している。今後の展開について山本氏は「日本人はフィジカルでは負けるかもしれないけれど、テクニックでは世界でも劣らない。利点を活かし、世界に通じるサッカーを高校から展開していきたい」と語った。

その後も、競技間連携や若手育成の重要性など各氏から意見が述べられ、最後は田嶋氏が「指導者を養成するということがチームを強くする唯一の方法。指導者が学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない」と締めくくった。

2日目は「一貫指導システムの構築〜地域における競技者育成プログラムの普及〜」「スポーツと目」「アンチ・ドーピング活動の国際動向と国内アンチ・ドーピングの活動のあり方〜ユネスコアンチ・ドーピングに関する国際条約の締結に向けて〜」「プロスポーツ有効活用事業（2003〜2005）の概要〜（財）日本プロスポーツ協会公認指導者制度の確率〜」と題した4つの分科会が行われ、どのテーマでも活発な意見が展開されていた。こうした場での意見



第7回GSAセミナーで講演する寺本選手

交換がより多くの現場で活かされることを願いたい。

●スポーツと環境

アジア生まれのセパタクローに魅せられて

去る4月21日、青山SIビルプレゼンテーションルーム（東京都渋谷区）にて、プロセパタクロー選手である寺本進選手を講師に招いた「GSAスポーツと環境セミナー」が開かれた。NPO法人スポーツ・グローバル・アライアンス（GSA）主催で開催されているこのセミナーは今回で第7回を数え、よりよい環境社会づくりに向けた運動として催されている。

寺本選手は2002年釜山アジア大会で銅メダルを獲得、2004年にタイに渡り、以来同国プロリーグに唯一の日本人選手として参戦している。1チーム3人で行うセパタクローはバドミントンと同じサイズのコートを使用し、足によるスパイクで得点

ON THE SPOT

する競技である。日本の競技人口はまだ2000人いるかどうかであるが、現在はアメリカやヨーロッパなどでも広まっており、オリンピック競技として採用されることが期待されている。

日本では選手の多くが大学から競技を始め、社会人になると競技との両立のためアルバイトとして働くのが一般的であるようだ。プロとはいえ、寺本選手も1シーズンの収入は約6万円だという。

大学卒業と同時にタイに渡ったが、当初は生活環境の違いから体調を崩し入院を繰り返したそうで、「電気製品もない、ご飯も虫が入っているのは当たり前、そんな環境で暮らし、タイの人たちは精神的にとっても強いと感じた」と話す。その一方で「生活に慣れてくると、日本人が弱いだけではないかを感じるようになった」とも言う。またタイの子どもたちは誰もが具体的な夢を口にできるそうで、靴などの道具がなくても外に出てセバタクローを楽しんでいると言う。日本はスペクテイタースポーツでは先進国だが、子どもたちの運動能力は年々低下しているのが現状であり、近代的な発展が運動能力の低下を招いていると言えるだろう。

寺本選手はGSAメンバーでもあり、タイでの試合では、相手選手に英語で記された手紙とともにカーネーションの種を配っている。首都バンコクでは2ストバイクの排気により大気汚染が進んでいることから、「いつまでも自然を大切にしてほしい」との願いが込められている。日本でも失われつつある自然との共存共栄というスタンスを、スポーツを通して世界に伝える。寺本選手の活動は世界に出ていくアスリートの手本となるのではないだろうか。

●アスレティックトレーナー

関西連絡会セミナー報告

(財)日本体育協会公認アスレティックトレーナー関西連絡会(以下、AT関西連絡会)が主催する「平成18年度第1回アスレティックトレーナーセミナー」が、去る4月22日に武庫川女子大学(兵庫県西宮市)で行われた。このセミナーは、関西でアスレティックトレーナーを志して勉強する学生トレーナーを対象に、AT関西連絡会が毎年3回程度行っているものであり、講師は日本体育協会公認アスレティックトレーナーが務める。またAT関西連絡会の会員もセミナーのサポートに入ること、スタッフの充実を図っている。

今回はテーマを「足関節のテーピング」と題して、鶴池政明氏(大阪体育大学)を講師に、テーピングの基礎を中心とした内容が進められた。

大学生や専門学校生を中心に、計38名の参加者はまずテーピングを行う際の原則などを確認したのち、自分の足やパートナーの足で「ランドマーク(骨指標)」や足関節の靭帯・足根洞の場所などの確認を行った。テーピング実技では、機能的に巻くための注意事項や、「ホースシュー」、「フィギュアエイト」などの目的や巻き方のコツなどを1つずつ確認しながら行われた。

さらに足関節のテーピングに求められる背屈制限や底屈制限などのバリエーションも練習した。

講習会後半には、鶴池氏から「ATは評価なしでテーピングは巻けない」と指摘され、「ただやみくもにテーピングでぐるぐる巻き

にしたり、とりあえずテーピングを巻くということがないように」と注意を促された。さらに対象の選手に必要なテーピングの強さを決めたり、必要な制限を決めるための方法として「触って痛みの場所や程度を知る」「スペシャルテストの知識」「機能評価」について説明された。とくに機能評価では、鶴池氏が実践している「ホッピング」を用いる方法や「リーチテスト」「ジャンプ幅の距離の評価」「8の字走」が例として挙げられた。最後にオーバークースに対するガイドラインが説明され、学生トレーナーも参加した会員も熱心に聞き入る姿がみられた。

今年度初めてのセミナーであったが、熱心な姿勢で取り組む学生トレーナーが多く集まっていたのが印象的であった。こうしたセミナーをステップに公認ATを目指して知識技能を高め、トレーナー活動を充実させてほしいものである。

AT関西連絡会は今後もこのような活動を通して、トレーナーの育成に少しでも力になれるよう努力・協力を図っていく。会員相互や学生トレーナーの交流の場としてこうした機会を積極的に活用していただきたい。

(報告者：小柳好生・武庫川女子大学)



鶴池氏の講義を熱心に聞くトレーナーセミナー参加者たち

●スポーツ支援

病魔と戦う現役アスリートへのさまざまな支援体制

日本人女子砲丸投げ選手として、初めて18mの壁を突破した森千夏選手（東京高校クラブ）。本誌でも、日本記録保持者である森選手が、実際に取り組んできたトレーニングプログラムを幾度かにわたり掲載してきた。

2004年のアテネオリンピックにも出場した森選手は、現在、「虫垂ガン」という病気と戦っている。

虫垂ガン自体が症例があまりなく、少ない情報から治療法を探している。完治とともに、6年後のロンドンオリンピック出場を目指し、闘病生活を送る森選手に対し、去る4月には、母校の東京高校陸上競技部を中心に「森千夏を応援する会」が立ち上げられた。

鞏丸ガンを克服し、ツール・ド・フランスで7連覇を達成後、自らの名前で財団を設立し、ガン撲滅に力を注ぐランス・アームストロング氏のように、トップアスリートだからといって、突然病魔に襲われ、記録や相手以外のものと戦わなければならないことが時として生じる。現役のトップアスリートとして北京オリンピックを目指していた森選手も例外ではなく、免疫力を向上させるリンパ球治療は保険適用外であるため、一度の治療に数十万円の費用がかかるのが現状である。所属企業との契約も今年3月に切れ、経済的にも多大の負担がかかることになった森選手の応援に、母校だけでなく陸上競技連盟も「森千夏選手応援募金」を設立した。

さらに去る5月6日に大阪市長居陸上競技場で開催された「国際グランプリ陸上大阪2006」では、出場

した為末大、澤野大地、池田久美子、福土加代子らトップ選手たちが、森選手への募金や情報提供を呼びかけるなど、協会と選手が協力して支援していく姿がみられた。

こうした成果が実を結び始め、全国各地から多くの資金援助や情報が集められ、「現在の治療に向けて専念できる状態になってきた。たくさんの方々の“助けたい”という思いが結集した成果だと思う。とてもありがたいこと」と応援する会発起人でもある小林隆雄氏（東京高校）は言う。募金は6月末まで呼びかける予定だそうだが、情報の送り先、森選手の病状についてなど詳細は下記をご参照いただきたい。

「森千夏を応援する会」(<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~makenki/morichinaturnews.htm>)

〒146-0091 東京都大田区鵜の木2-39-1 東京高等学校陸上競技部
郵便振替口座 00140-5-411666
取り扱い郵便局 大田鵜の木郵便局
「森千夏選手応援募金」(日本陸上競技連盟)

郵便振替口座 00130-9-721151
取り扱い郵便局 渋谷神南郵便局

●スポーツと行政

神奈川県体協の新会長が山下氏に

神奈川県体育協会は、2006年度からの新会長として、山下泰裕氏（東海大学教授）が就任することを決定し、去る3月31日に神奈川県庁にて発表記者会見が行われた。

まず神奈川県知事の松沢成文氏から山下氏が会長になるまでの経緯について説明された。これまで同県では県体育協会会長は戦後、歴代の知事が兼任してきたが、知事の兼務の見直しを進めていること、そして民



神奈川県体育協会新会長となった山下氏

間活力を活用することから、会長職について民間出身で活動力のある山下氏に打診したそうだ。忙しいスケジュールということもあり山下氏は難色を示したものの、松沢知事の度重なる就任要請と、大学や県からも協力を得られることになり、悩んだ末に就任を決めたという。

就任に際して山下氏は「スポーツにおいて選手が活躍することで、多くの人たちが勇気づけられることは、自身も選手として、あるいは監督として活動するなかでその価値を知っている。神奈川で育ったスポーツ選手が、日本だけではなく世界で活躍してほしい。それを支援していくためのシステムづくりができないかと思っている」と述べた。

山下氏は、柔道界で2001年秋から活動している「柔道ルネサンス」について紹介した。これは勝ち負けだけにとらわれず、柔道を通じた人づくりに取り組んできた運動であり、今後は同様に同県でも「スポーツを通じた青少年の健全育成に取り組んでいきたい。神奈川県指導者も人づくりを大切にしながら活動してほしい」と話した。

さらに2004年のアテネオリンピックでは、柔道のパラリンピックに

ON THE SPOT

出場する選手との合宿を行ってきた例を挙げ、「スポーツの素晴らしさをできるだけ多くの人に体験してほしい。また中高年の人たちがスポーツに親しむことによって、より健康に充実した人生のお手伝いができるのではないかと提議した。

最後に、環境問題への取り組みについても触れ、神奈川県恵まれた自然を次世代に残していくためにスポーツ界もその責任を果たしていく必要があると話し、「理事会、評議会、各競技団体の賛同を得ながら少しずつ進めていきたい」と所信表明を行った。

新会長の任期は2年間。スポーツ医学分野でもさまざまな施策が注目されている神奈川県体育協会の今後の動きに注目していきたい。

●データ分析

競技スポーツにおけるビデオ分析の活用

現在のスポーツ現場では、試合結果や競技中のパフォーマンスをビデオを使って分析することが主流になりつつある。ビデオ分析を行うことにより、単純にチームや選手のパフォーマンスのチェックをするだけでなく、相手チームの戦術の分析なども可能になる。デジタルビデオ分析システムの1つで、世界の多くのチームによって使用されているSportsCode（スポーツコード）の「第2回SportsCode日本国内ユーザーカンファレンス」が去る4月22日に、フィットネスアポロ社ADSSデジタルスタジオ（東京都品川区）にて開催された。

まず比佐央氏（フィットネスアポロ社ADSS事業部）から、SportsCode V.6の新機能と新商品「GameBraker Plus」の説明後、オーストラリアに



オーストラリアでの活用例が語られたハニング氏のキーノートレクチャー

おけるビデオ分析の現状が紹介された。2002年当時、シドニースワズ（AFL）では、ビデオを分析するスタッフが分析および編集を行い、各コーチがオーダーしたシーンを抜き出して見せている状況だったが、ここ数年でそのやり方が変化したと言う。現在はコーチや選手が自分自身でビデオの分析を行い、それを専門のスタッフが編集して1つのデータにまとめる。そのため、以前は分析担当スタッフの目から見た分析のみであったが、「現在はコーチや選手の目から見た分析に変わりつつある」と比佐氏は言う。

続いて行われたキーノートレクチャー1では、マイケル・ハニング氏（オーストラリア・スポーツテック社アジア地区マネージャー、ニュージーランド・アカデミー・オブ・スポーツ（NZAS）テクノロジーアドバイザー）が、スポーツテック社の理念とラグビーを始めとしたユーザーの活用事例について説明した。

同社では、基本方針である「情報や知識を分かち合うことが真の力となる」を念頭に、それぞれのユーザーの活用法を他のユーザーに紹介している。それによりユーザー間のネットワークを広げビデオ分析のビジネスを育てている。活用事例として、オタゴラグビー協会とウェールズラ

グビー協会での実践例を挙げ、情報の収集および活用がいかに大切であるかを示唆した。

ニュージーランドのなかでも選手人口が少ないオタゴラグビー協会は、スカウティングのシステムとしてデータベースを活用し、ジュニア層からトップ選手まですべての選手を把握することに役立っている。これにより、他の州よりも低コストで有効的に選手をリクルートすることが可能であるようだ。一方、ウェールズラグビー協会は、選手が協会のデータベースにいつでもアクセスすることができ、各自で試合のチェックや相手チームの情報収集などを行うことができることも紹介された。

続いて行われたキーノートレクチャー2では、白井克佳氏（国立スポーツ科学センタースポーツ情報研究部）が、国立スポーツ科学センターにおけるSportsCodeを用いたゲーム分析や強化活動の支援、競技団体テクニカルスタッフの育成の例を挙げて説明、紹介した。

日本においてもチームスポーツを中心に多くのチームがビデオ分析を活用する傾向にある。世界と戦うためだけではなく、国内で戦うにおいてもビデオ分析のノウハウはますます重要になってきているのではないだろうか。